

教員研修留学生の受け入れと教育：
日本語能力の問題を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野呂, 幾久子, 畑, 俊明, 上田, 功 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008331

教員研修留学生の受け入れと教育

—日本語能力の問題を中心に—

The Necessity of the Japanese Language Proficiency
in the Enrollment and Education of Teacher Training Students

野呂幾久子・畑俊明**・上田功***

Ikuko NORO・Toshiaki HATA・Isao UEDA

(平成7年2月28日受理)

1 はじめに

教員研修留学生制度とは、日本政府（文部省）の奨学金により、主として発展途上国の現職の初等・中等学校教員および教育関係機関の専門職員などを、1年半の間日本の教員養成大学などに留学させる制度である。その趣旨は、1 日本の教育方法、専門教科、教育経営などを学習し、帰国後に本国での教育水準の向上に貢献するような幹部要員の育成に協力すること
2 日本の教育現場に触れる機会を研修計画の中に幅広く取り入れ、日本の社会および教育に対する理解を促進すること、の2点である。この制度は1980年度より開始され、今年で15年目を数える。その間教員研修留学生の受け入れ数は徐々に伸び、1980年度の40名から1994年度の150名へと増加している(付表1)。この制度の本来の目的は、日本の教育についての研修である。募集要項^①によると、応募資格は初等・中等教育機関、教員養成機関の現職の教員または教育行政機関の教育専門職員で、「日本語を学習し、かつ日本語で研究指導を受けようとする者」^②とある。また大学における専門研修についても、「日本語で行われる」^③旨が明記されている。つまり専門研修は日本語で行われるので、本来ならば研修開始前に日本語能力を備えていることが望ましいわけである。ただし「日本語能力が不足する留学生は、配置された大学又は文部省が指定する日本語研修コースで日本語教育を受ける。日本語教育期間は、最初の6カ月間であるが、配置大学によっては専門研修と並行して、日本語教育を実施する場合がある」^④と但し書がついており、日本語能力が不十分な場合でも、研修開始後に専門教育に先だて、あるいは専門教育と並行して日本語教育を受けることができる制度になっている。しかし1年半という限られた留学期間の中で、日本語を身に付け、さらにその日本語を使って専門研修を行うことはかなり困難なことである。このように教員研修留学生にとって大きな問題となるのはその日本語能力であり、これが彼らの留学の成果を左右すると考えられるのである。そこで本稿の目的であるが、次の3点

1 教員研修留学生の日本語能力はどの程度であるのか

* 日本語教育講師（現国語教育助教授） ** 技術教育教授 *** 英語教育助教授（現大阪外国語大学助教授）

- 2 もし日本語能力が不足しているのならば、どのような点が不十分なのか
- 3 2の不足を補うためには、どのような方法が考えられるのか

以上を静岡大学教育学部（以下本学）の教員研修留学生を例にとって、考察を進めていきたい。

2 教員研修留学生の教育体制

本論に入る前に、本学における教員研修留学生の教育体制について簡単に述べたい。まず日本語教育であるが、教員研修留学生の場合ほとんどが日本語能力ゼロで来日するため、入学後1年間（10月～翌年7月）は初級の授業を受ける。本学の初級コースは、1コマ90分で週10コマあり、『新日本語の基礎 □・』（スリーエーネットワーク）を教材として、文法・会話を中心に行う。また漢字は、『新日本語の基礎 漢字練習帳□』（スリーエーネットワーク）の250字を学習する。翌年10月から翌翌年の3月までは中級クラスに属し、週7コマの授業を受ける。内容は『総合日本語初級から中級へ』（凡人社）を使った、文法・講読・会話・作文中心の授業である。漢字は『新日本語の基礎 漢字練習帳』で、250字学習する。

日本語教育と並行して行われる専門教育は、週1～2回指導教官に会い、個人指導を受けるケースがほとんどである。これを補助する目的で全員にチューターがついている。本学では研修修了時に「研究論文」の提出を義務付けているので、論文作成または論文発表時には、日本語などの面で大いに助けとなっている。この論文は大体半年間でテーマを確定し、1年間かけて書くことが多い。

このほか、日本語教育と専門教育のブリッジング・コースとして、ジャパン・セミナーを開催している。これは「日本の教育」をテーマとして、留学生の専門教科についての入門編ともいえる内容を、各教科の教官が解説するものである。またジャパン・セミナーでは同時に、剣道、日本の伝統音楽、焼き物の実技なども行っており、日本文化・日本事情理解の目的も持っている。以上が本学における教員研修留学生の教育体制の概要である。

3 教員研修留学生の日本語能力

本学では1981年度より教員研修留学生の受け入れを始め、これまで毎年平均6名の研修生を受け入れている。現在は第13期生および第14期生が研修中である。（2月1日現在）

表1は、静岡大学教育学部が過去5年間に受け入れた教員研修留学生29名の、出身国、日本での専門分野、日本語学習歴、来日時の日本語能力、来日時の所属日本語クラスをまとめたものである。「日本語学習歴」および「来日時の日本語能力」は、応募書類に書かれた本人の自己申告による。また「来日時の日本語クラス」は、日本語学習経験の無い者は初級クラス、「有り」と答えた者については授業開始前に日本語教育担当者が面談を行い、その結果に基づいて決定されている。

教員研修留学生の受け入れと教育

表1 教員研修留学生の日本語能力

第10期（研修期間：1990年10月～1992年3月）

第11期 研修期間：1991年10月～1993年3月）

留学生	出身国	専門	日本語 学習歴	来日時の		
				日本語 能力	日本語 クラス	
S1	シンガポール	音楽科 教育	10カ月	R W S	不可 不可 不可	初級
S2	ブラジル	化学	1年	R W S	不可 不可 良	初級
S3	ブラジル	体育学	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S4	フィリピン	理科教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S5	フィリピン	社会科 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S6	タイ	学校 経営学	1年	R W S	良 良 良	初級
S7	ミャンマー	経済学	なし	R W S	不可 不可 不可	初級

留学生	出身国	専門	日本語 学習歴	来日時の		
				日本語 能力	日本語 クラス	
S8	韓国	歴史学	2年	R W S	優 良 良	日本語の 授業には 出席せず
S9	フィリピン	認知 心理学	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S10	マレーシア	日本語 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S11	タイ	生物学	3カ月	R W S	不可 不可 不可	初級
S12	タイ	英語科 教育	半年	R W S	不可 不可 不可	初級
S13	インドネシア	技術科 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級

第12期（研修期間：1992年10月～1994年3月）

第13期（研修期間：1993年10月～1995年3月）

留学生	出身国	専門	日本語 学習歴	来日時の		
				日本語 能力	日本語 クラス	
S14	アルゼンチン	保健体育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S15	マレーシア	学校教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S16	タイ	英語科 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S17	フィリピン	数学科 教育	2カ月	R W S	優 良 良	初級 中級
S18	タイ	理科教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級

留学生	出身国	専門	日本語 学習歴	来日時の		
				日本語 能力	日本語 クラス	
S19	フィリピン	数学科 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S20	タイ	日本音楽	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S21	ブラジル	国語科 教育	2年	R W S	良 良 不可	中級
S22	インドネシア	英語科 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S23	ラオス	教育行政	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S24	パラグアイ	数学科 教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級

第14期（研修期間：1994年10月～1996年3月）

留学生	出身国	専門	日本語学習歴	来日時の		
				日本語能力	日本語クラス	
S25	アルゼンチン	家庭科教育	1年半	R W S	良 良 良	初級
S26	タイ	被服学	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S27	メキシコ	教育学	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S28	フィリピン	情報教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級
S29	マレーシア	情報教育	なし	R W S	不可 不可 不可	初級

* 「来日時の日本語能力」で、Rは「読む能力」を、Wは「書く能力」を、Sは「話す能力」を表す。

まず「日本語学習歴」に関しては、来日前に日本語学習経験の無い研修生が29名中20名で、全体の約7割を占めている。これらの研修生は、当然「来日時の日本語能力」についても、読み・書き・話すともに「不可」と答えている。また学習経験のある9名のうちでも、3名が読み・書き・話すともに「不可」と答えており、自己申告で「優」または「良」と答えた6名のうち3名は、授業開始前の面談によって「初級レベル」と診断されている。この結果「来日時の日本語クラス」は、26名が初級、2名が初級および中級に所属し、日本語の授業を免除された研修生は1名であった。つまり、研修開始時点で、研修に必要な日本語能力を有する研修生はわずか1名であり、ある程度日本語能力があると診断された研修生と合わせても約1割にすぎず、残りの9割の研修生は日本語能力が全く無かったということになる。

この結果、1年半の留学期間中に、まず日本語を身に付け、さらにその日本語を使って専門研修をする、という形を取らざるをえないことになる。実際は日本語の習得には時間がかかるので、専門研修と並行した形で日本語教育が行われることになり、これまでほとんどの研修生が全留学期間を通じて日本語の授業を受けている。しかし、もしこの日本語教育プログラムを完璧に消化したと仮定しても、日本語能力ゼロの留学生の場合、基礎的な日本語運用能力の習得はかなりの程度まで期待できるものの、高度に専門的な日本語との間にはまだ相当のギャップが存在することが予想される。例えば本学が義務付けている論文であるが、現状では日本語以外に英語で書くことも認めているため、これまで約9割の教員研修留学生が英語で提出している。また大学としては、大学院、あるいは学部の授業への出席を勧めており、実際に出席する留学生も毎年半数ほどいるが、結局日本語の問題で授業についてゆけず、放棄してしまう研修生が大半である。このように、教員研修留学生の教育において最も問題となっているのが、専門を学んだり、研究したりするための日本語能力であることは明らかである。そこで次節では、留学生の日本語能力を、特に専門教育との関係においてさらに詳細に見てゆくことにする。

4 専門教育・研究と日本語能力

それでは教員研修留学生の日本語能力は、専門研修にどのような影響を与えているのだろうか。第10期から第13期までの24名の教員研修留学生の指導教官に対して、専門研修を行う上での日本語能力について、アンケート調査を行った。

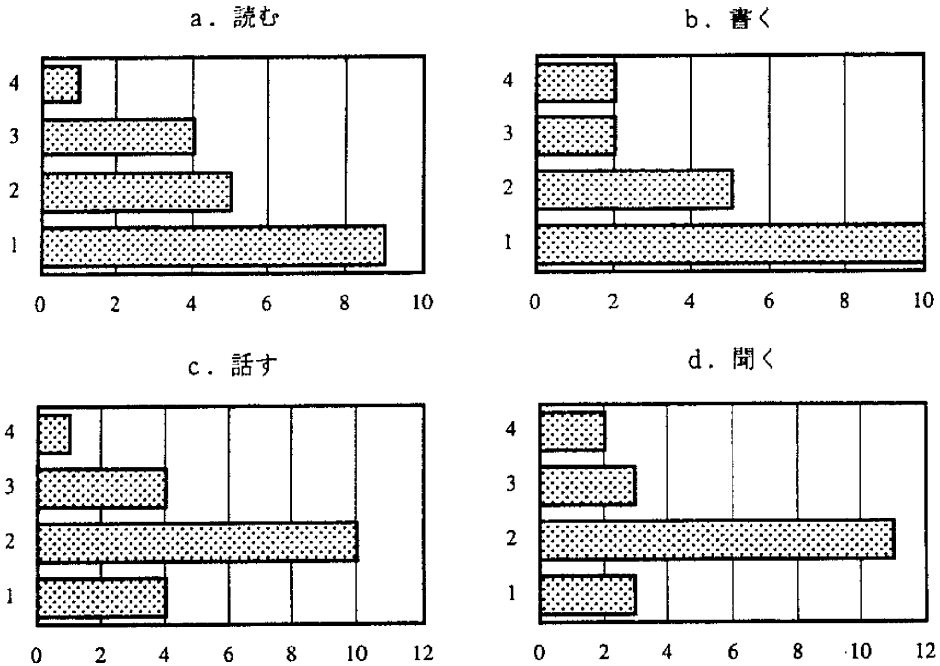
アンケート1は、読む、書く、話す、聞くの四技能が、専門研修を行う上でどの程度のレベルであるかを調べたものである。質問内容は下に示したが、各技能とも1が最も低く、4が最も高い日本語能力となっている。その結果が次ページの図1である。

指導教官に対するアンケート1（四技能別の評価）

質問：先生が担当された教員研修留学生の日本語能力について、1から4の中で当てはまるものに○をつけてください。

- 読む
- 1 専門について日本語で読んで理解することはできない。
 - 2 専門についての簡単な文章を読んで理解できる。
 - 3 専門についての本や論文を、指導教官やチューターなどの助けにより読んで理解できる。
 - 4 専門についての本や論文を読んで理解できる。
- 書く
- 1 専門について日本語で書くことはできない。
 - 2 専門についての簡単な文章が書ける。
 - 3 専門についてのレポートや論文が、指導教官やチューターなどの助けにより書ける。
 - 4 専門についてのレポートや論文が書ける。
- 話す
- 1 専門について日本語で話すことはできない。
 - 2 専門についての簡単な話ができる。
 - 3 専門についての自分の意見や考えを、正確に相手に伝えられる。
 - 4 ゼミなどに参加して発表や討論ができる。
- 聞く
- 1 専門についての話を日本語で聞いて理解することはできない。
 - 2 専門についての簡単な話を聞いて理解できる。
 - 3 専門についての話を正確に聞いて理解できる。
 - 4 講義・ゼミの内容を聞いて理解できる。

図1 指導教官による日本語能力の四技能別評価



*縦軸は選択肢の番号を、横軸はそれを選んだ人数を表す。

*全回答数19

図1によると、a「読む」、b「書く」については、1の「専門について読んで理解したり書いたりすることはできない」が最も多く、「読む」9名、「書く」10名であった。逆に4の「専門について読んで理解したり、レポートや論文を書くことができる」は、「読む」1名、「書く」2名であり、3の「指導教官やチューターなどの助けがあればできる」と合わせても、「読む」5名、「書く」4名と、全体の約4分の1にすぎない。またc「話す」、d「書く」では、2の「専門についての簡単な話をしたり、聞いて理解することができる」が最も多く、「話す」10名、「聞く」11名であった。しかし4の「専門について発表や討論をしたり、講義やゼミを聞いて理解することができる」は、「話す」1名、「聞く」2名、3の「専門についての意見や考えを正確に相手に伝えたり、相手の話を聞いて理解することができる」は、「話す」4名、「聞く」3名であり、4と3を合わせてもやはり全体の約4分の1であった。本来専門研修を行うためには、読む・書く・話す・聞くの四技能全てについて4、少なくとも3レベル以上の日本語能力が必要であると思われるが、指導教官の判断では、各技能とも4レベルは全体の約1割、それに3レベルを含めても4人に1人という結果になった。

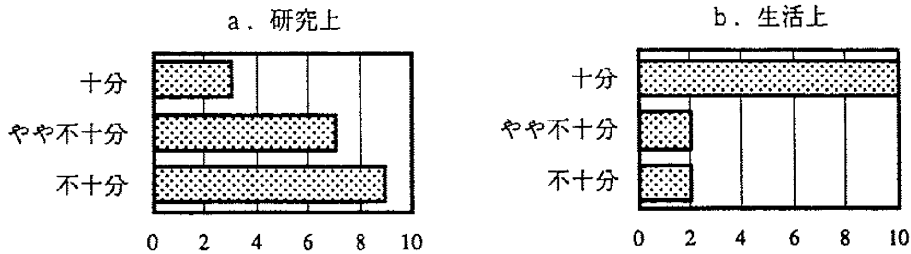
次にアンケート2は、研究指導上、生活指導上の日本語能力について、指導教官の総合的判断を求めたものである。結果は下の図2である。

指導教官に対するアンケート2（総合的評価）

質問：先生が担当された教員研修留学生の日本語能力は、研究指導をする上で、または生活指導をする上で十分でしたか。当てはまるものに○をつけてください。

1 不十分
2 やや不十分
3 十分

図2 指導教官による日本語能力の総合的評価



*全回答数 19

図2を見ると、研究指導面では「不十分」が9名、「やや不十分」が7名で、「十分」と答えた指導教官はわずか3名である。しかし生活指導面では逆に「十分」が10名と最も多く、「不十分」または「やや不十分」は4名である。このことから、教員研修留学生の日本語能力は指導教官から見て、日常生活をおくるには十分だが、研究を行う上では不十分であるとの結果になった。

以上のような日本語能力の不足によって生じる問題点としては、指導教官によると、「日本語で専門についての情報を得ることが難しい」点につきるといえる。例えば、指導教官の説明を聞く、日本の教育現場を見学する、研究上必要なアンケートやインタビューを行うなどの研修の中心的な部分が、日本語能力の問題により達成しにくいわけである。特に注目すべきは、「読み」「書き」の能力の不足である。このため、研究活動の最も重要な部分をなす、文献の講読や、持論の展開に著しい支障をきたすことになる。そしてこの結果、英語の文献だけで研究を行ったり、どうしても必要な日本語の文献については、指導教官が一つ一つの単語の意味

を英語で翻訳したり、例示や板書によって説明するなど、時間をかけて指導をすることになるが、日本の教育に関する英語の文献は多くはなく、また指導教官の指導時間も限られているため、十分な研修ができないのが現状である。

5 結論

以上、教員研修留学生の日本語の問題点について述べてきた。もちろん留学の成果は学問上・研究上の成果のみによって測られるべきものではない。しかし教員研修留学生の研修目的が専門研修であり、また「教育」という分野の性質上、日本語を使わない研修（英語による研修）が難しいことを考えると、やはり日本語能力は不可欠であると言わざるをえない。しかし現状のように日本語能力ゼロで来日し、専門教育と並行して日本語教育を受ける形では、日常生活には十分でも、専門研究に必要な日本語能力をつけることはほとんど不可能である。このような教員研修留学生の日本語の問題を改善し、教員研修留学生にとって、また受け入れる側にとってもこの制度がより有効に行われるためには、教員研修留学生が来日前にある程度の日本語力をつけることが必要ではないかと思われる。そのための方法としては、以下の2点が考えられる。

- 1 応募資格に日本語能力（日本語能力試験で言えば3級合格程度）を含める
- 2 選考および合格通知の時期を早め、研修が決定した人は来日前に日本語学習をすることを条件とする

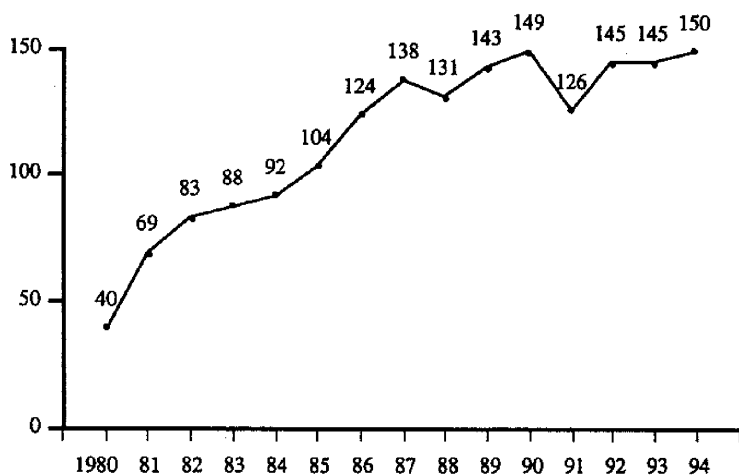
現在国際交流基金では、毎年12月の4日から10日の間の日曜日に、世界30カ国・地域、63都市（1994年度）において、日本語能力試験を実施している。この試験の受験を義務づけ、少なくとも3級合格程度以上の日本語能力を持つことを応募条件とするというのが第1の案である。しかし1だけに限ってしまうと、日本語教育を受けられない地域の研修生、あるいは教育は受けられても、受験地に遠いために受験ができない研修生ははじめから応募できず、研修生の門戸を狭める恐れがある。そこで2の方法との併用が考えられる。すなわち現在より選考時期を早め、少なくとも来日半年前（来日する年の春頃）までに合格を通知し、来日前に日本語学習を行うことを条件とするというものである。応募者が現職の教員である点を考えると、フォーマルな形での日本語教育は、研修生の出身国の事情によっては期待できない可能性があるが、その場合は必要とする合格者に語学教材を送り、それをを用いて独習することができる制度を作るなどの方法が考えられる。英語と日本語では事情が異なるが、フルブライト留學生のように、出発前に研修生本人の責任において日本語学習をすることを条件としてはどうかというのが第2の案である。

このように来日前にある程度の日本語能力をつけてきてもらい、その上ではじめの半年程を "Japanese for academic purpose" に基づいた日本語指導に使い、教育現場の研修を多く取り入れれば、より効果的な研修になろう。特に日本語が重要な役割を果たす文系の科目に関しては、日本語能力の充実が欠かせないのではないかと思われる。

注

- (1) 1994年度日本政府（文部省）奨学金留学生募集要項 教員研修生
- (2) 同上
- (3) 同上
- (4) 同上

付表1 教員研修留学生受入数の推移



謝辞

アンケートに答えて下さった19名の指導教官の先生方、および静岡大学教養部の日本語・日本事情の中里弘子先生、熊井浩子先生にお礼を申し上げます。